

書評 L.A. Lebhun, The Heart Is Unknown Country: Love in the Changing Economy of Northeast Brazil

著者	田村 梨花
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	42
号	4
ページ	95-99
発行年	2001-04
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008006

L. A. Lebhun,

The Heart Is Unknown Country : Love in the Changing Economy of Northeast Brazil.

Stanford: Stanford University Press,
1999, xi+297pp.

田 村 梨 花

はじめに

ある日、妻が家に帰ると、差出人のない手紙が配達されていた。文字の読めない妻は、その手紙を娘に読むように言う。その手紙には、彼女の夫に恋人がいることと、2人の関係が詳しく書かれていた。娘はショックで体をこわばらせ、妻は神経症(nervos)の発作を起こしてしまう。夫が浮気をしていたことと、妻が発作を起こしたことは、近所中に知れわたり、夫は自分の不義な行いを改めざるを得ない状況に置かれ、問題は解決される——しかし、その手紙は実は、夫の浮気に苦悩していた妻自身が、友人に代筆してもらったものであった。娘の受けるショックと、自分に起こると予想された発作、近所の人々の反応から、夫の反省心が呼び起こされるだろうと意図した上で、彼女がとった行動であった。

本書は、ブラジル北東部のカルアル(Caruaru)におけるフィールドワークをもとに、急速な社会経済的変化が、求婚や結婚、同棲と不義、それに付随する感情(emotion)に与える影響を考察したものである。著者のレブンは、急速な都市化と貨幣経済の拡大が、労働者階級の夫婦間の結婚を決定する物理的、経済的、感情的親交を相対的に変容させ、さらに、人々、特に女性が、結婚そのものにロマンティックな理想を抱くようになると論じている。愛を感情の一形態としてとらえ、愛(amor)に関する人々の語

りを通して、その変容を明らかにしようという意欲的な試みである。ロマンティックな感情は、従来、エリート層特有の「西洋的」なものであるというディスコースによって論じられることが多かった。しかし、著者の意図は、そうした観点から感情を近代化の指標として分析することにはない。むしろ、カルアルの人々にとって「ロマンス」、「西洋」、「近代」が何を意味するのか、その概念の具体化が、彼らの生活にいかに影響を与えているかを分析することにある。

フィールドとなったカルアルは、ブラジル北東部ペルナンブーコ(Pernambuco)州内陸部に位置する中都市である。レブンは、本論で展開されるフィールドワーク以前にも、乳児死亡率に関する医療人類学的調査の助手として、同じく北東部の都市であるフォルタレーザ(Fortaleza)を訪問している。ブラジルの有する複数文化性、意味の多層化、偏在する矛盾に関心を持ち、1988年から1990年の2年間、本書のもととなった博士論文執筆のため、いまだ完全に都市化が進んではいないが、もはや農村地域ともいえない都市での、曖昧な社会形態における人々の生活に着目して調査を行った。調査当初は、人々の感情表現の語彙と、民俗医療用語とを関連させた言語学的研究を行う予定であったが、次第に、そうした感情が語られるディスコース、特に愛情表現のディスコース分析に関心を持ったとしている。

著者は、都市における人々のさまざまな関係性のパターンを明らかにし、そのパターンが農村から都市へとシフトする社会において、いかに変容しているかを示すために、愛(amor)とそれに関連する言葉に着目した。人々により語られる愛は、家族、親戚、男女間の愛というように、その性格はさまざまであるが、本書では一貫して、情熱としての愛と、結婚を前提とした愛、婚姻関係を結んだその後の愛を語る時に生じている、男女間のディスコースの違いに注目している。それにより、夫婦間の権力関係を分析し、複雑な気持ちの積み重なる感情としての愛の理解をめざしている。

I 本書の構成、章の概略

本書の構成は以下の通りである。

- イントロダクション：ブラジル北東部の愛の研究
- 第1部 カルアルにおける経済と感情
- 第1章 問題——感情の性質——
- 第2章 背景——カルアル、アグレスチの首都、セルタオンの入り口——
- 第3章 関係としての愛——曖昧な経済における社会的ネットワークと感情——
- 第2部 変化する経済とロマンティックな恋愛
- 第4章 ロマンズと近代化
- 第5章 男性性と女性性の理想——分裂しゆく社会における愛——
- 第6章 求婚、結婚、同棲——夫婦愛の実際——
- 第7章 ブラジル北東部における愛の言葉
- 第8章 友愛関係における不義とロマンティックな結婚
- 第9章 カルアルにおける愛

本書は2部構成であり、第1部では感情と経済に関する事柄の概略が説明され、第2部ではロマンティックな情熱の特徴が詳細に分析されている。

第1章は、感情の研究を、従来の人類学的理論のレビューと、著者自身のフィールドワークによる事例から検討している部分である。人類学の感情研究は、初め生態学、民族心理学的に影響を受けながら取り組まれてきたテーマであった。その後、フーコーの権力論とディスコース分析の影響を受け、感情は、社会の構成員が相互に理解し、あるいは支配するために常に操作される意図的な存在として分析されるようになる。それに対して、あくまで感情を生理的反応として位置付ける生物学的決定論がある。著者は、両論に対し折衷の立場をとり、感情を個人的なものであると同時に人間関係によって生まれるものとして定義している。

続いて、女性が感情を巧妙に操作する事例をあげている。これが、冒頭に記述した女性の事例である。nervosと呼ばれる神経症は、何らかの強いストレス

が原因で、人間がある激しい感情に襲われる状態を示した民間の医学用語であり、感情表現の語彙とされる。民間伝承では、動物の精神が人体に入り込むことによって起こると言われてきた症状である。この女性は、ショックを受けたときに自分を襲うだろう nervos という感情の高ぶりを利用し、夫の不義な行為を止めさせようとした。しかしその一方で、たとえ不義な行為をしていても、その男性が働き者でいい夫だと社会的に認められている限りは、その症状は彼女の性癖として片づけられてしまう場合もある。著者は、心の状態の現われである感情も、社会経済的状况に左右されてしまうことを指摘する。

第2章は、ブラジル北東部カルアルの経済、地理、歴史の概要に関する記述である。植民地時代の名残りがいまだ土地に存続している北東部は、ブラジルの中でも貧困指数の高い地域であるが、同時にノスタルジックな場所として、文学作品やテレビドラマの舞台となることの多い場所でもある。カルアルの位置するアグレスチ (Agreste) は、洪水の多いゾナダマッタ (zona da mata)、乾燥していて土地が貧弱なセルタオン (Sertao) とは異なり、比較的肥沃な土地であるが、それでも旱魃に襲われることの多い地域である。北東部では、そうした自然環境の厳しさが生活の苦しみとして転換され、愛は、そうした環境において人々との関係を強固にする存在として解釈される。また、近代都市の特徴を持つカルアルにおいても、いまだパーソナリズム (personalism) は強固であり、雇用を得るためには社会的ネットワークが欠かせない現状を指摘している。

第3章は、カルアルの社会的ネットワークの性質と、愛の持つ感情的側面と経済的側面との関連性についての部分である。カルアルにおいて人々相互の関係は非常に緊密であり、そこで愛とは、愛情ではなく、関係性を表わす言葉となる。そして、経済の変化とともに愛の感情も多様化する。カルアルの社会は、いまだ物々交換システムといったインフォーマルな経済によって成り立っている部分が多い。パトロンクライアント関係の習慣も残っている。人々はそうした習慣と、貨幣経済の相互関係の規範との間でジレンマを抱えながらも、社会的ネットワーク

を維持することは経済価値を有すると理解しながら行動している。

本章では、経済的なものにかかわらず、そうした曖昧な状況に対処する方策としてブラジルのジェイチーニョ (jeitinho brasileiro) に着目する。狡猾に物事を進め、状況を凌ぐ方法であるジェイチーニョは、政治家や経済的に裕福な人々が使うときにはインモラルだとされるが、社会的に弱い立場の人々が使う場合には否定的な意味を持たず、生存のための手段として認識される。さらに、ジェイチーニョが用いられる際の男女間の差異に注目した場合、男性の場合には雇用を得るため仲間集団内での関係を保つことに用いられ、女性の場合は個人間で用いられると分析する。

第4章は、ロマンティックな情熱に関する近年の理論を、近代化と照合しながらまとめている部分である。歴史学において、ロマンティックな結婚は近代化の副産物だとされることが多い。特に、資本主義経済の発達により個人の経済的自立が可能になると、取り決められた結婚よりも、個人的に惹かれる相手との結婚を望むようになる。また、性愛に関しては、カトリックの教義で貞節が重んじられていた背景はあるが、植民地時代のブラジルでは、白人女性の不足と奴隷制の影響から、黒人女性に対する性愛の感情を、結婚という範疇には含まずに、奴隷に対する慈愛の感情として解釈する傾向がみられたとしている。その傾向は後に、男性が婚姻外の女性と性的関係をもったり、女性が自らの経済状況を克服するために男性側の感情を利用したりすることに結びついていると論じている。しかし同時に、婚姻関係にある女性は貞節を求められる。男女間の権力関係は、感情そして性的な慣習の両面で変化を遂げることとなる。

第5章では、道徳的理想、生活空間という視点から、男女間の差異に注目する。特に、不義な行為が、男性の場合は、仲間うちで交わされる冗談のひとつとして済まされ、ある意味名誉あることとして解釈される傾向があるのに対し、女性が不義な行為をした場合は深刻なダメージとなることを論じている。さらに、空間の認識については、ブラジル社会にお

ける〈家 (house)〉と〈路上 (street)〉の概念を取り上げる。親交、歓待、暖かさを意味する家は女性の領域、支配のための闘争、暴力の場を意味する路上は男性の領域として認識される。社会的に家を持つことが安息の地を手に入れることをさし、〈家 (casa)〉と〈結婚する (casar)〉の2つの言葉の同義性に着目した上で、女性にとり結婚が重要な意味を持つディスコースを明らかにする。経済的变化によって、女性も一日中家にいるようなことはなくなったが、それでもなお、家は女性の領域であるというディスコースが残っていることを示す。経済的独立と愛の分析では、女性は、自分を支配する親から独立して自由になりたい、という気持ちから男性との愛に走るが、結局のところ夫となる男性からの支配を受けることになるという考察がある。これは、引き続き本書で展開される結婚と夫婦関係をめぐる男女のディスコース分析において、重要な視点となる。

第6章では、結婚に関する正式な取り決めについて考察する。結婚は、単なる個人の結びつきではなく、財産や忠義、奉仕に及ぶさまざまな権利が絡む絆を形成する。結婚には法的、宗教的規定が複雑に関与し、それらは近代化に伴う経済社会的状況の変化に影響を受けることを考察している。例えば、必ず教会で結婚式を挙げていた昔とは違い、今では役所で簡単に結婚の手続きを済ませる習慣が出来た。しかしその一方、夫婦間で性的関係があった場合、法律上は離婚できても宗教上はできないといったケースがある。

以前は、結婚までには長期間の婚約期間がおかれ、婚約までの求愛の期間に体に触れるようなことはありえなかったが、今ではその形はすっかり変わった。婚約期間は1年から2年と短期間となり、婚約後別れるケースも多くなった。結婚までのみきわめのため、他の相手を選ぶことを可能にするため、お互いの経済的自由を束縛しないためといった理由から同棲生活の状態を選び、正式な結婚を避ける傾向もみられる。そうした生活と、男性自身の誇示を意味する求愛と性愛の獲得が肯定的にとらえられる考え方があいまって、ひとりの男性が複数の女性と関係をもつことを可能とする状況が形成される。

本章では特に、適齢期を過ぎた年頃の独身の女性がひとりで暮らすことに対する社会的偏見が存在し、そのことが好きでもない相手との結婚を招いたり、男性と同棲する原因となっていることが強調される。悪い噂をたてられることは、経済的にも被害を受けることにつながるので、正式な婚姻関係を結ばずに同棲する女性が増加していると考察する。

第7章では、人々の愛の語りを考察する。愛の物語がどう語られているか、男女間の差異に注目して分析する。男性にとって、愛の到達点とは相手との性的関係を意味する。しかし、真実の愛は母の愛、神への愛だと捉えている。女性は、幼いときに抱いた理想の男性との結婚を愛の到達点だとするが、それは決して実現しないことを自覚していて、夫婦間の愛を友愛 (companionate)、思いやり (consideração) として解釈する。そのような状況では、情熱は、愛とは異なる感情となる。情熱は、特に男性が好きな女性に求愛する時の感情である。情熱を抱いていることは男性性の誇示ともいえる。女性は、真実の愛を一夫一妻の形として思い描くのに対し、男性は、妻への感情は愛、妻以外の女性に対する感情は情熱として使いわけていることを分析する。著者はさらに、賃金労働主体の社会においては、長期間の同棲が解消される場合、法的社会的保障が何も無いために、女性がダメージを受けやすいことにも言及する。近代化は、女性が夢に描くロマンティックな愛が実現不可能なものではないと思わざるを得ない状況をつくるが、逆説的に、そうした愛を理想の、そして真実の愛として求める傾向を強く促す。

第8章は、男性の不義をめぐるディスコース分析の部分である。不義 (infidelity) はラテンアメリカの文学作品において最も取り上げられるテーマであり、夫の浮気はつきものとして解釈されていることが多く、妻もそれが経済的脅威にならない限り堪え忍ぶ傾向が強いとされる。本書では、そのステレオタイプを確認するのではなく、男性側、妻以外の女性側、そして正妻側の詳細なディスコース分析を行っている。男性は、妻以外の女性との性交渉を、愛や結婚とは無関係のものだと解釈している。ただし、その女性との関係は一度では終わらない。長期化し、

半同棲状態に達することも多い。内縁の妻となる女性は、相手の男性が既婚だと知らずに関係を持つことも多いが、既婚だと知っていて関係する場合もある。経済力があれば既婚でも問題ないとする場合もある。男性は、ジェイチーニョを使って重婚すれば、相手の女性は既婚となり、社会的地位も得られるとして自分の行動を正当化する。妻は、そうした不義な行為の原因を、夫の単なる性的好奇心としたり、相手の女性が経済的に貧窮していることが原因だとする。夫の不義に苦しみながらも、経済的自立は困難なので、離婚はしない場合が多い。また、妻側が不義を行うことは、妻本人にダメージを与えることになるのでまずないとされる。女性の不義は夫の性的欠陥を意味し、男性性の破壊ととらえる男性が多く、殺人事件の原因にもなる程のダメージを与える行為である。男性の不義は、結果的に女性が愛に幻滅する状況をもたらすが、それを逆に利用し、不義を問い糺すことで、自分への愛を再確認する女性もいる。また、不義により最も傷つくのはその家庭の子どもであるとされ、特に、不義な父親と娘の関係は緊張したものとなることが考察されている。

第9章は、結論として、婚約期間の短さ、ロマンティックな恋愛結婚に特徴づけられる近代的な結婚の形態が、カルアルにおける愛の感情に影響を与えていることを分析している。経済的側面が絡むと愛は万能のものではなくなるし、性的側面が強まると搾取や支配という手段により、乱用されるものにもなってしまう。社会経済的変化は、男女の役割や振舞いに影響を与えるから、愛のディスコースも当然変容する。さらに、ブラジルの路上と家のディスコースが相関して論じられる。夫は路上で浮気をしてもいいが、家にいるべき妻は貞節であるべきとするディスコースは、女性に感情的、経済的側面で苦悩を与える原因となる。しかし、必ずしも女性はそうした男性側のディスコースを受け入れているだけではない。自分自身の感情を操作して、男性の不義を止めさせ、問題を解決する巧妙な技術を持っている。それが、冒頭で出てきた女性の行動である。浮気が公けになり、それが自分の社会的地位にまで被害をもたらす事態を起こしていることを自覚させれば夫

の不義は終わる、という彼女の計画は、見事に功を奏したのである。

II 若干のコメント

社会経済的状況の変容に伴い、理想の愛と理想の結婚の形は複雑化する。著者は、詳細なインタビューにより、愛と結婚にかかわる感情の推移、その感情の正当化を、男性と女性それぞれの語りから分析する。人間の抱く感情のなかでも極めてパーソナルな、恋愛、夫婦間の感情、特に夫の不義の正当化とそれに対する妻の忍耐という感情を、正面から捉えようとした本書の分析は、非常に興味深いものである。著者は、近代化の副産物として捉えられがちな感情が、地域本来の恋愛、結婚観といかに融合し、多様な形をとるのかに注目した考察を展開する。そして、インフォーマントの語り、特に愛を語る時の表現を一字一句忠実に記述、分析することにより、恋愛感情という複雑な心境が、社会生活、結婚生活においていかに人々の心のなかで折り合わされているかを描写することに成功している。そうした感情、思いの聞き取りが可能であった背景に、著者とインフォーマントとの間に築かれた信頼関係が存在していたことは想像に難くない。

本書は、ブラジル北東部の都市とも農村とも定義し難い地域としてカルアルをフィールドに選び、愛と結婚観の変容を社会経済の変化とジェンダーの視点から分析している。そして、ジェイチーニョや路上と家の概念といった、ブラジルの社会文化を分析する際に用いられる概念に注目し、それらの関連性を明らかにするよう試みている。その観点は、多層的で多様なブラジル社会において、それらの概念がいかに人々によって利用され、操作されているかを分析する貴重な手がかりとなる。本書は、文化を静態的なものとして捉えず、日常生活において人々がそれをどう解釈し、捉え直しているのかという、動態的な理解が重要であることを提起している。

しかしながら、もう少し詳細な分析と検討が必要ではないかと感じられた部分も多々ある。まず、感情研究、特に愛に関する先行研究のレビューの部分が少なく、愛と結婚観がロマンティックなものとしていく過程を論じるには比較が不十分である。また、社会経済的変化との関係性を追う程には、時系列を考慮した分析になり得ていない。もう少し世代間の幅をとった考察であれば、経済的側面と道徳観念の変容、愛という感情の変容過程がさらに明確になったと思われる。本書では、現代はロマンティックな恋愛結婚を現実にするのが困難な時代であると論じるが、それ以前の理想的な結婚のあり方とは何であったか、結婚における葛藤は存在しなかったのかという点が疑問に残る。

著者は、本書の結論を以下のように結んでいる。「真実の愛と完璧な結婚は、心理的、感情的、経済的親交がすべて得られた時、初めて可能となる。みな、それが実現可能なものだとは考えないが、真実の愛は強固にイメージ化され、そうした結婚の実現が最も困難な時代において、最も求められるものとなる。愛を構成する感情はいつの時代も、人生において最も強力で、最も重要で、最も必要とされる感情である。愛の物語は、人間の心の未知なる土地 (unknown country) についていろいろなことを教えてくれる存在なのである」。

日本では、感情を扱った研究は社会学で一部みられるが、人類学の研究はいまだ僅少である。恋愛、特に夫婦愛における感情は、社会的なつながりを強めもするが、多くの場合、個人、特に女性を苦しめる原因にもなりうる。そして、それは経済の主体となる世帯構成に直接影響を与える存在でもある。その意味で、「知られざる心」を解き明かした本書は、恋愛という捉えどころのない感情をめぐる考察が、文化研究のみならず、地域開発や開発経済研究においても貴重な分析視点となりうることを示唆する研究である。

(上智大学大学院地域研究専攻博士課程)